

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 12 日現在

機関番号：13802

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25463468

研究課題名(和文) 自閉症スペクトラム障害をもつ子どもと家族への看護実践力向上を目指した基礎的研究

研究課題名(英文) Fundamental Research That Is Aiming to Improve the Nursing Practice for Children with Autism Spectrum Disorder and Their Families

研究代表者

坪見 利香 (TSUBOMI, RIKI)

浜松医科大学・医学部・助教

研究者番号：40452180

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、外来における自閉症スペクトラム障害を含む発達障害児への看護実践を目指す研修プログラムを開発することを目的とした。保護者が必要としている看護支援は、待合室での配慮と、子どもがもつ感覚特異性と通常感覚との差異と対処であった。看護師は、自閉症スペクトラムの子どもへの対応に困難を感じており、具体的な対応について学ぶ機会を必要としていた。これらの結果より開発した研修プログラムは、子どもの示す行動の具体例の提示と子どもの実感を交えて説明することで、障害理解が促進されることが示された。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to develop a training program which aims to practice nursing care for children with developmental disabilities including Autism Spectrum Disorder during their hospital visits. Nursing assistance required by parents is waiting room care and how to handle the difference between normal senses and senses for children who has sensory specificity. Nurses feel that it is difficult to handle children with Autism Spectrum so they needed to have the opportunity to learn about specific correspondence. The developed program suggested that it will promote the understanding for the disability by explaining the characteristics of the disabilities with the experience of the children.

研究分野：小児看護学

キーワード：自閉症スペクトラム障害 発達障害 外来看護 研修プログラム 具体的な対応

1. 研究開始当初の背景

2005年に発達障害者支援法が施行された。近年、発達障害に関する概念は定着してきており、一般の医療機関にも発達障害と思われる「気になる子」の受診は増加しつつある。

発達障害、特に自閉症スペクトラム障害のある子どもは、状況に応じた適切な行動をとることが難しく、対人関係において状況を正しく理解するなど社会的スキルが乏しいという特性がある。看護師をはじめ、医療者が障害特性に配慮した対応ができない場合、子どもや家族には辛い体験として強く記憶に残ることが考えられる。発達障害児と保護者が安心して診察や治療を受けるためには、医療機関での受け入れ態勢や、看護師も含めた専門性の向上は不可欠である。しかし、現状では発達障害を専門としている小児神経科医や児童精神科医が専門に診療している医療機関は少ない上に安心して受診できるような受け入れ体制の整備や、看護実践に関する報告は極めて少ない。

先行研究(坪見・大見, 2009)では、医療機関に勤務する外来看護師の約90%が、発達障害あるいは気になる子どもへの援助経験があるものの、障害特性に応じた対応の困難さがあることが明らかになっている。

本研究は、発達障害児の保護者が具体的にどのような看護支援も必要としているのか、外来看護師は、発達障害児への適切な看護実践のために、具体的に何を学びたいのかを明らかにすることで実践力向上のための研修プログラムの構成要素を明らかにすることができると考えた。

2. 研究の目的

本研究は、自閉症スペクトラム障害を含む発達障害のある子どもと保護者が必要としている外来看護支援および、看護師の発達障害児への具体的な対応に関する研修ニーズを明らかにしたうえで、発達障害児に対する看護実践に関する研修プログラムに必要な要素を明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

(1)自閉症スペクトラム障害を含む発達障害のある子どもと保護者が必要としている外来看護支援

調査対象者

発達障害を専門とする医療機関の外来に通院しているADHDあるいは自閉症スペクトラム障害と診断を受けた子どもの保護者147名を対象に、質問紙調査を実施した。質問紙は、直接配布し、郵送法および留置き法によって回収した。67名より回答を得た(回収率46%)。調査では、子どもが定期的に受診している診療科のうち、「どの」診療科の受診に

困難を感じるのか、受診の際、保護者は「どのような」子どもの行動に困難を感じるのかについて尋ねた。

調査期間

2014年5月～6月

(2)外来看護師の研修ニーズ調査

調査対象者

静岡県内の小児科・耳鼻咽喉科・眼科・皮膚科を標榜している診療所の看護師239名を対象に、発達障害の理解と支援に関する研修ニーズについて質問紙調査を実施した。質問紙は、郵送法を用いて配布、回収した。174名より回答を得た(回収率73%)。調査では、発達障害に関してこれまで「何を、どのように」学んできたのか、発達障害児の障害特性に配慮した看護実践を「どの程度」知っているのかについて尋ねた。

調査期間

2014年4月～6月

(3)発達障害児に対する看護実践に関する研修プログラムの作成

(1)と(2)の分析結果をもとに、発達障害児に対する看護実践に関する研修プログラムに必要な構成要素を明らかにしたうえで、研修プログラムの素案を作成した。研修会の所用時間は90分であり1回完結型とした。

(4)発達障害児に対する看護実践に関する研修プログラムの実施および評価

調査対象者

愛知県三河地区・尾張地区で小児科・耳鼻咽喉科・眼科・皮膚科を標榜している診療所に勤務している看護師を対象に、研修会を実施した。研修会の実施前後に、自記式質問紙調査を実施し、留置き法にて回収をした。

研修前の調査内容では、発達障害児に対する看護師の対応に関する知識(20項目)について「とても知っている」5点から「全く知らない」1点の5件法を用いた。研修後の調査内容では、参加者による研修会全体の満足度、研修会前に実施した発達障害児の看護に対する認識(20項目)と、診療における子どもと保護者の状況に対する関わりへの積極性、場面を想定した、子どもの行動に対する予測と看護師としての対応についてたずねた。

調査期間

2015年4月～5月

(5)倫理的配慮

本研究は、浜松医科大学医の倫理委員会の承認を得て実施した。

4. 研究成果

(1)自閉症スペクトラム障害を含む発達障

害のある子どもと保護者が必要としている
外来看護支援

発達障害の診断を受けた子どもが受診する際に保護者が困難を感じた診療科は耳鼻咽喉科 28 名、小児科 27 名、歯科 21 名、眼科 15 名、皮膚科・内科 5 名、児童精神科・外科 3 名、整形外科 2 名、口腔外科 1 名であった。保護者が困難を感じているのは、通院頻度が多い小児科に加え、耳鼻咽喉科、歯科、眼科など診察時に何らかの器具や光を用いている診療科であった。

外来受診で保護者が対応に困難を感じた子どもの行動(20項目)について5件法を用いて尋ねた。数値が5点に近いほど困っている程度が高いことを示す。保護者が困難を感じた子どもの行動は、「待合室でじっと座ってられない(3.50)」、「採血を嫌がる(3.41)」、「点滴を嫌がる(3.35)」、「医師の問いに答えられない(3.34)」であった。保護者は、子どもの多動、強い拒否、言語理解などの発達障害による特性によって受診時に困難さを感じていた。

発達障害と診断されている子どもは、何らかの医療ニーズを抱えていることが明らかになった。発達障害児は、一般の子どもと同様に予防接種や健診のほかに感染症の罹患により受診する機会が多い。

感染症を中心とする日常的な診療、予防接種、乳幼児健診に加え、受診先の相談を受けるなど健康問題全般に関するニーズに対し、障害特性に応じた適切な対応の必要性が明らかになった。

保護者が子どもの受診で困る診療科は、小児科、耳鼻咽喉科、歯科が多かった。通院の回数は小児科と比較して少ないものの、耳鼻咽喉科と眼科の受診時に保護者が困っていることが明らかになった。これらの診療科は、診察時に器具を使用することが多い。診察ユニットや顕微鏡による光刺激や、耳鏡や鼻鏡による触覚刺激、分泌物を除去するために吸引器を使用する際の聴覚への刺激に対する過敏性によって強い苦痛が生じるため保護者は困難を感じていた。

外来受診で保護者が対応に困難を感じた子どもの行動は、「待合室でじっと座ってられない」ことであった。待合室は、診療を受けるための心理的な準備をする場である。診療内容を子どもなりに理解して安心して受けられるような支援が看護師に必要とされていることが明らかになった。

(2) 外来看護師の研修ニーズ調査

発達障害に関する教育を受けた経験があ

ると回答した者は、20%(34名)、ないと回答した者は78%(136名)であった。発達障害について自己学習の経験があると回答した者は47%(82名)であった。看護師が自己学習に利用した資料は、一般書籍22%(37名)、看護関連の書籍20%(34名)、教科書とテレビ番組18%(32名)、看護雑誌13%(23名)であった。

発達障害児の看護実践に関する知識(20項目)については、5件法を用いて尋ねた。数値が5に近いほど知識があることを示す。結果、「自閉症スペクトラムの子どもが診察を受ける時の不安」、「子どもが症状をうまく伝えられない時の対応」、「落ち着かなくて動き回る子どもへの対応」、「ADHD児が診察を受ける時の不安」、「診察や処置での子どもへの言葉かけ」の5項目は3点以上を示していたが、それ以外の15項目は平均が3点以下を示していた。「パニックを起こした時の対応」と、「待ち時間の過ごし方」の2項目は、2点以下を示していた。発達障害児の看護実践に関する知識を小児科と小児科以外の所属で比較した結果、「パニックを起こした時の対応($t = 3.32$)」と、「待ち時間の過ごし方($t = 3.32$)」の2項目で有意差($p < 0.05$)があり、小児科看護師が、耳鼻咽喉科、眼科、皮膚科の看護師より平均値が高く、知識に差があることが示された。

発達障害児への看護実践に関する研修への参加希望は74%(128名)があると回答していた。研修会の希望時間帯は、週末の午後27%(47名)、平日の午後15%(26名)、平日の午前14%(24名)であった。看護師の参加可能な時間は平均2.2時間であり、研修の形式は、1回完結型52%(91名)、複数回型26%(46名)であった。研修で扱う学習内容で、平均値が高い項目は、「子どもが理解しやすい説明」、「子どもの特性を考慮したうえでしてはいけないこと」、「診察や処置での子どもへの言葉かけ」であり、自閉症スペクトラムやADHDに共通した内容であった。

小児科のみならずさまざまな診療科の外来看護師は、病棟勤務の看護師よりも子どもと関わる機会が多い。看護基礎教育で発達障害について学んだ経験がない看護師は、発達障害に関するさまざまな資料を通じて積極的に知識を得ようとしていたことから、発達障害について関心が高いことがうかがえた。これにより、子どもが受診するさまざまな診療科の看護師を対象とした研修の機会が必要であるといえる。

看護師は発達障害への関心が高く、自己学習を行っていたが、実際の診療場面に活用できるような具体的な対応に活かすことができる情報を得るには至っていないことが示された。

外来看護師の発達障害に関する研修に必

要である条件としては、主な研修受講者は、30歳代から50歳代を想定し、「子どもが理解しやすい説明」、「子どもの特性を考慮したうえでではいけないこと」、「診察や処置での子どもへの言葉がけ」、「自閉症児がパニックを起こした時の対応」、「待ち時間の子どもの過ごし方」を1回完結型で教授できるプログラムが必要であることが示された。

(3) 発達障害児に対する看護実践に関する研修プログラムの作成

発達障害児の保護者が必要とする外来看護実践からは、待合室での子どもの過ごし方、予防接種・点滴など痛みを伴う処置への対応、器具を用いた診療への対応、子どもが理解できる説明の工夫という課題が示された。

発達障害児への対応に関する看護師の研修ニーズからは、子どもが理解しやすい説明、子どもにしてはいけないこと、診察や処置での子どもの言葉がけ、自閉症児がパニックを起こした時の対応、待ち時間の子どもの過ごし方という課題が示された。

以上の内容から、研修プログラムの目標は、参加者に期待される行動と実践が可能となることを明確にするために、「発達障害児が医療機関を受診する際に体験する苦痛や保護者の心理について理解したうえで、具体的な診療場面における適切な対応が理解できる」と設定した。

(4) 発達障害児に対する看護実践に関する研修プログラムの実施および評価

研修会全体の満足度を0から100の数値により回答を求めたところ、平均値は85.2であった。研修プログラムの構成に基づいた項目を設問として参加者が得た知識について7割を超えた項目は、子どもが落ち着く環境の工夫や発達障害児が診察を受ける時の心理状態、発達障害児が理解しやすい説明の方法、子どもの感覚の過敏さ、パニックを起こした時の対応の5項目であった。この結果から、研修プログラムの構成内容は発達障害児の対応について新たな知識を獲得する内容であることが確認された。

研修会に対する要望は、「具体例を増やしてほしい」、「時間や回数を増やしてほしい」の2点に整理された。

(5) まとめ

本研究は、プログラムの構成要素を明らかにするために、発達障害児の保護者が必要としている看護支援について調査をした。結果から、発達障害のある子どもは、待合室で落ち着いて過ごすことができないことや、器具を用いる診療科で困難を感じていることが明らかになった。待合室では子どもが体験す

る視覚、聴覚、嗅覚などの五感に対する感覚特異性に由来する反応によって不安や恐怖が増幅されるため、診療を受ける心理的な準備が整っていないことが困難につながっていることが明らかになった。このことから、看護師はまず発達障害のある子どもと保護者の待合室での配慮と、子どもがもつ感覚特異性と通常感覚との差異について気づくこと、またその対処法について理解する必要性が示された。

看護師への調査の結果より、看護師が求めている研修内容は、診療場面で起こりうる子どもの行動への対応に困難を感じている項目が多いことが認められた。看護師が希望する研修時間は2時間以内で1回完結型が最も多かった。

外来看護師が参加しやすい研修プログラムは、複数の診療科の看護師を対象とするため、参加者が吸収できる情報の容量に限界があることから内容を精選する必要があることが示された。

次に、研修プログラムの有効性について述べる。プログラムは2部構成を基本とした。第1部では、障害理解に重点を置いた内容とした。看護領域ではこれまで発達障害に関する実践報告が少ない、障害特性の個人差が大きく一般化されにくいといった課題が指摘されてきた。本研究における研修プログラムでは、子どもの受診中の行動を提示し、なぜそういった行動をとるのかについての理由を説明し、子どもが困っていることを緩和する方法について具体例を提示しながら説明を進めていく形式とした。プログラムの検証結果から、子どもの示す行動の理由について障害特性を交えて説明することで、行動に注目するのではなく子どもの実感について考える機会が障害理解を促進するうえでは有効であることが明らかになった。

第2部では、複数の診療科に共通した診療場面における子どもの具体的な対応について、場面に応じた対応を複数提示しながら説明を行った。結果、具体例が不足していたという課題が明らかになった。

研修プログラムの適切性を評価するための指標として、障害理解の構成要素(徳田、2005)に基づいた評価を行った。この結果から、研修プログラムが、外来診療に密接に関係した知識や認識を獲得し、日常的な業務に活かすことができる内容であったことを示していると言える。

本研究にて開発した発達障害児に対する看護実践に関する研修プログラムは、外来看護師に対する効果的な研修プログラムのあり方や、障害理解の視点からみても適切なものであり、子どもが受診するあらゆる診療科の看護師に対して有効な研修であると結論

づけることができる。

<引用文献>

坪見利香・大見サキエ(2009)軽度発達障害と診断または推測される子どもに対する小児科外来看護師の対応の困難さの現状と課題、*育療*、44、40-51。

徳田克己(2005)、徳田克己・水野智美編著、*障害理解 心のバリアフリーの理論と実践*、256-263、誠信書房。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

TSUBOMI Rika, OMI Sakie, The present condition of an outpatient nurse's match - When the child of a developmental disability consults -, *The Asian Journal of Disable Sociology*, 13, 2013, 65-77.

坪見利香、発達障害に関する外来看護師の対応の困難さとコミュニケーション力、障害理解研究、(15)、2014、21 - 28.

TSUBOMI Rika What Children with Developmental Disabilities are Troubled about in Outpatient Examinations: Based on the Research with the Parents, *The Asian Journal of Disable Sociology*、14、2014、15-24.

[学会発表](計5件)

TSUBOMI Rika, The present condition of an outpatient nurse's match - When the child of a developmental disability consults -, *アジア障害社会学会第14回大会*、2013.9.

坪見利香、発達障害に関わる外来看護師が求める研修(1)、*アジア子ども支援学会第5回大会*、2014.9.

TSUBOMI Rika, What Children with Developmental Disabilities are Troubled about in Outpatient Examinations: Based on the Research with the Parents, *The 14th Asian Journal of Disable Sociology*、2014.9.

坪見利香、中野さちこ、発達障害児への看護実践に関する研修プログラムに必要な内容

- 保護者が必要とする看護支援と看護師の学習ニーズから -、第63回日本小児

保健協会学術集会、2016.6

坪見利香、中野さちこ、外来看護師が求めている発達障害児への看護実践に関する研修内容、第24回日本小児看護学会学術集会、2016.7.

6. 研究組織

(1)研究代表者

坪見 利香 (TSUBOMI RIKA)
浜松医科大学・医学部・助教
研究者番号：40452180

(2)連携研究者

徳田 克己 (TOKUDA KATSUMI)
筑波大学・医学医療系・教授
研究者番号：30197868

(3)研究協力者

中野 さちこ (NAKANO SACHIKO)